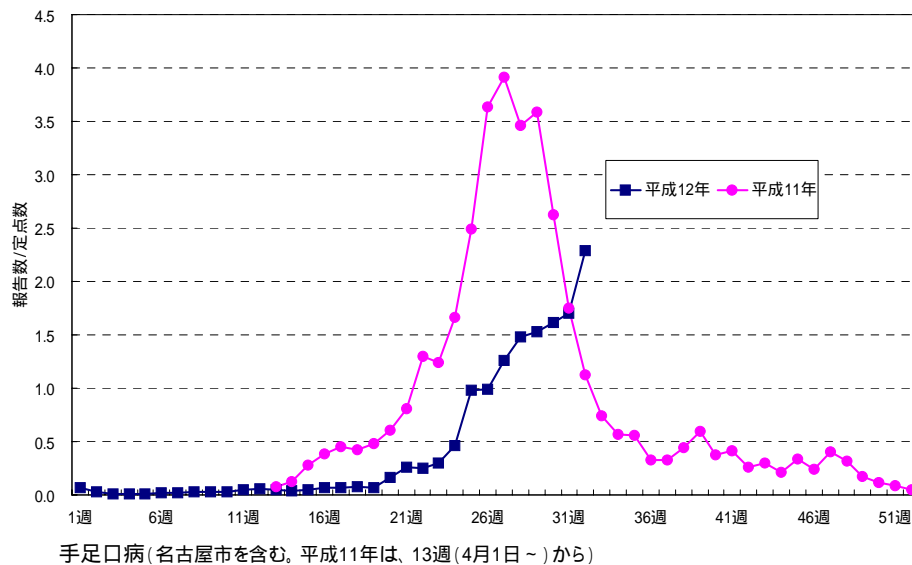


愛知県感染症情報

平成 12 年第 32 週（8 月第 2 週）

（コメント）

手足口病は依然流行中です。昨年のピークは 27 週頃でしたが、今年は 1 ヶ月以上ピークが遅れているようですので、注意してください。



（先生方からのコメント）

● 尾張西部地区

- ・ 感染性胃腸炎には、下記の患者が含まれます。

病原性大腸菌保有者 3 名（O-1 6 歳男、O-8 2 歳男、O-114 1 歳男）

アデノウイルス抗原保有者 2 歳男

ロタウイルス抗原保有者 8 カ月男 2 名

マイコプラズマ肺炎 4 名（0 歳男、1 歳女、3 歳男と女）

（尾西市 城後小児科）

● 尾張東部地区

- ・ サルモネラ腸炎 O-8 6 歳女。ヘルパンギーナが少し増えています。（瀬戸市 津田こどもクリニック）

- ・ 今週は手足口病が目立ちました。（口腔内所見のみの症例や発熱を伴う症例が多いように思われました。）

ヘルパンギーナはほとんどみられなくなりました。

（尾張旭市 佐伯小児科医院）

- ・ 病原性大腸菌感染症 O-1 9歳男
(豊明市 豊明団地診療所)
- ・ 今週も手足口病がみられました。
(春日井市 かちがわ北病院)
- ・ 手足口病が増えている。髄膜炎例あり
(小牧市 小牧市民病院小児科)
- ・ 8/9(水)麻疹発生。大阪より帰省直後に発病とのこと。
(大府市 まえはらこどもクリニック)
- 西三河地区
 - ・ 病原性大腸菌 O-6 1歳男、O-8 9歳男
サルモネラ腸炎 7歳男
(豊田市 星ヶ丘たなかこどもクリニック)
 - ・ 成人(女性)の伝染性紅斑は本人のこども(7歳女、7月27日発症)から感染したものと思われます。
(岡崎市 小児科延寿堂杉浦医院)
 - ・ 細菌性腸炎は目立ちました。
サルモネラ O-4 6例、サルモネラ O-9 1例、病原性大腸菌 O-6 2例
カンピロバクター 2例、エルシニア^{*1} 1例、エロモナス^{*2} 1例(重複あり)
(岡崎市 花田こどもクリニック)
*1. エルシニア: 腸内細菌科に属し、食中毒や下痢症の原因菌の一つである。
*2. エロモナス: ビブリオ科細菌(コレラ菌の仲間)の一種。化膿性疾患を起こすことがあるほか、下痢症(食中毒)の原因となる。
- 東三河地区
 - ・ 保育園で手足口病が増えてきました。
(豊橋市 あずまだこどもクリニック)
 - ・ 病原性大腸菌 O-6 疑い 3歳男
(豊橋市 こどもの国大谷小児科)
 - ・ 手足口病再度増加
(蒲郡市 蒲郡市民病院)
 - ・ 手足口病が広がってきています。
マイコプラズマ肺炎、3例。
(田原町 かわせ小児科)

(1 ~ 3 類感染症の発生状況)

腸管出血性大腸菌感染症患者 2 名

- ・ 春日井保健所から報告の 53 歳女 8/4 発病、8/4 初診、8/7 診定。
菌型は、O-157
- ・ 西尾保健所から報告の 19 歳女 7/31 発病、8/9 初診、8/13 診定。
菌型は、O-157 VT2 (+)

腸管出血性大腸菌保有者 1 名

- ・ 豊田市保健所から報告の 40 歳女 8/9 初診、8/13 診定。菌型は、
O-157 VT2 (+)

(全数把握の 4 類感染症の発生状況)

アメーバ赤痢患者 1 名。

第 31 週 (7 月 31 日 ~ 8 月 6 日) の 4 類感染症の全国状況

咽頭結膜熱は例年の同時期にくらべ定点当たり報告数はかなり多くなっているが前週より減少し、過去 10 年間と比較すると 1991 年の流行 (ピーク時の定点当たり報告数 0.5) に次ぎ 2 番目に大きな流行となっている。特に定点当たり報告数が多くなっているのは、和歌山県 (3.6) と香川県 (2.5) である。手足口病、ヘルパンギーナは第 28 週をピークに減少傾向にある。麻疹の患者報告数は依然大阪で多い。流行性耳下腺炎は熊本県で定点当たり 3.3 の報告がある。流行性角結膜炎は沖縄県、奈良県、愛媛県、東京都、茨城県、徳島県、高知県などで定点当たり報告数が多くなっている。

(Infectious Diseases Weekly Report より抜粋

厚生省感染症研究所感染症情報センター感染症情報)

熱帯の太陽にハイビスカスやブーゲンビリアが咲いている最高気温32のパキスタンのカラチ地区の調査から帰ってきましたらこの連日の名古屋の暑さでバテています。いつも貴重な情報を有難うございます。7月後半のまとめをお送りします。

1. 名古屋市内：ヘルパンギーナと手足口病が流行中で無菌性髄膜炎の入院例も目立っていますが例年より多発しているとか重症例が多いというような情報はいただいていません（夏休みに外国からの重症の手足口病などの輸入が心配なのですが大丈夫のようです）。ムンプス全体の症例数はあまり多くないのにムンプス髄膜炎の合併例が目立っています。注意したいと思います（名鉄病院宮津先生、第一日赤有吉先生、国立病院松下先生、第二日赤岩佐先生、城北病院渡辺先生、千種区今枝先生、三菱病院岩間先生、中京病院柴田先生、労災病院伊藤先生、大同病院水野先生）。その他、O-157を含む細菌性大腸炎（第二日赤岩佐先生、三菱・岩間先生）、膿痂疹の小流行とブ菌性火傷様皮膚症候群（千種区今枝先生、労災・伊藤先生）、アデノウイルスの流行性角結膜炎（国立・松下先生）、肺炎・気管支炎（大同・水野先生、名鉄・宮津先生）、川崎病（第一日赤有吉先生）、溶連菌感染症散発（労災・伊藤先生、三菱・岩間先生）、ヘルペス歯肉口内炎の入院（国立・松下先生）などのお手紙です。要入院例の目立つ麻疹の発生が保育所単位で市内各地区で認められ、なかにはワクチン接種例も罹患しているようです。今後の流行状況（特に休み明け）に注意したく思います。

2. 尾張地区：犬山市武内先生からはヘルパンギーナ減少、手足口病増加、伝染性膿痂疹が多い、津島市民病院長田先生からはヘルパンギーナとムンプスが目立つ、江南市昭和病院尾崎先生からはブ菌性火傷様皮膚症候群で何名か入院、岩倉市永吉先生からはヘルパンギーナ多発中で溶連菌感染症とムンプスが続発中、軽症の無菌性髄膜炎あり、常滑市民病院肥田先生からは手足口病が流行中で口内疹がひどくて入院を要した例あり、半田市立病院からはムンプスと水痘が散発、麻疹による入院1例ありとのお手紙です。

3. 三河地区：トヨタ病院木戸先生からは夏カゼ症候群のなごりで頭痛、嘔吐の例があり（何割かは髄膜炎）、無菌性髄膜炎やや増加（生後1ヵ月児も）、生後1ヵ月児の細菌性髄膜炎もあり、加茂病院大須賀先生からは高熱が続く咽頭炎の乳児が目立ち、サルモネラ腸炎、百日咳の入院例あり、岡崎市民病院系洲先生からは百日咳が目立ち、要挿管例3例経験、知立市近藤先生からは乳幼児のヘルパンギーナ増加中で手足口病は散発中、溶連菌感染症が多く、高熱性感冒で入院を要した例が2例あり、刈谷市田和先生からはヘルパンギーナ、水痘、手足口病が散発中で2-3日の発熱と頭痛を訴える例が少し目立つ、碧南市永井先生からはムンプス、水痘が時々ありヘルパンギーナは減少傾向、豊橋市宮澤先生からは手足口病、突発疹、高熱の夏カゼと無菌性髄膜炎などが目立つとのお手紙でした。

2000 年 6 月 16 日号 (75 巻 24 号)

デング/デング出血熱：2000 年における世界の状況。最近 30 年間で常存地が拡大し世界的な問題となっている。現在 100 カ国以上、世界人口の 40% (25 億人) の居住地区が熱帯・亜熱帯地区主体にデング熱の常存地となっていて、都市部・都市郊外中心に拡大中で、年間の罹患者数 5 千万例、うち死亡率の高いデング出血熱の罹患者数は 40 万例と推定され、小児死亡の原因疾患として重要となっている。(1960 年までのデング熱流行地とその後の拡大状況の世界地図と、東南アジア・西太平洋地区、中南米のデング出血熱の届出数の年次変化グラフが本文に示されている)。この都市部における患者数の激増には無計画な都市部への人口集中化。国際化に伴う旅行者の増加によるウイルス持込み、媒介蚊対策・水管理などの環境対策の欠如が原因として考えられる。デング熱には血清学的に 1~4 型があり、致死的な出血熱(出血熱の死亡率は 15%)を合併するのは一つの型の初感染で 0.2%、他の型による再感染で 10 倍となっていて(出血熱の発病に免疫が関連している)、ワクチン開発に関して 4 型全部に確実な免疫獲得が必要である、ワクチン接種が中途半端な免疫をあたえると再感染による出血熱の合併が危惧される、などの問題がある。現在デング熱ウイルスに有効な薬剤はなく、対策として重要なのは蚊対策、ないし衛生環境整備に重点がおかれている。

インフルエンザ：2000 年 6 月。オーストラリア A 型 H3N2、マダガスカル A 型 H1N1、ニュージーランド A 型。

世界のポリオ：世界各国のポリオ届出一覧表。ポリオ様急性弛緩性麻痺(AFP)届出状況は 1999 年でインド 2,814 (うちポリオ野生株陽性 1,126) 例、ナイジェリア 981 (95) 例、パキスタン 507 (313) 例が目立っている。

6 月 9 日 - 15 日届出。コレラ：ニジェール、リベリア。

2000 年 6 月 23 日号 (75 巻 25 号)

ウイルス性出血熱(クリミア-コンゴ出血熱)：アフガニスタン北西部、イランとの国境地帯グルラン地区。本年 5 月から発生が持続。25 例(死亡 15 例)。現在ウイルスの検索中(注：ダニ媒介性のウイルス性出血熱で一類感染症。一昨年はパキスタン西部、この数年間はシルクロード沿いの中央アジア諸国で羊飼いや牧民を中心に発生)。

種痘ウイルス感染症：ロシア。ウラジオストック地区で 8 歳の小児が実験室からの廃棄アンブルで遊んでいて種痘ウイルスに感染(軽症)。本報は種痘ウイルスと天然痘ウイルスが別種のウイルスであること、種痘ウイルスが各国室で保持されている必要性の説明。(注：子供が玩具にするような廃棄状況である問題にはふれていない)。

安全な出産：チュニジア。新生児破傷風対策として妊婦の破傷風トキソイド接種と出産の管理がすすめられている。

リンパ系フィラリア症：世界の状況。1997 年の WHO の会議以来公的・私的機関の協力で対策が進められている。99 年からは南太平洋諸国とエジプトで 20 万以上の住民を対象に抗フィラリア薬剤(年 1 回、4-6 年)投与で激減。アフリカではこれまでのオンコセルカ症(フィラリアによる失明)対策と組合せて計画が進められている。

インフルエンザ：2000 年 6 月。アルゼンチン、ブラジル。A 型 H1N1。

6 月 16 日 - 22 日届出。コレラ：ベニン、ブルキナファソ、コモロ、ガナ、リベリア、マリ、モザンビーク、ルワンダ、トゴ、タンザニア、ジンバブエ、インド。